



波が 日本 の



波が か い い !

生まれて初めて波に乗った時。
思えばあの瞬間から、波乗りの虜になった。
よりい波を求めて、世界に飛び出していった。
心のどこかで気になっていたいるホームブレイク。
日本のサーファーを生み、育て、癒し続ける日本の波を
もう一度見つめ直して、こん。
そうすればみんなが思うはずだ。
やっぱり日本の波が、いい!

写真：青木盛安、大尾邦彦、神尾光輝、
片岡弘道、橋田勇人
Photo by Masaki Kurosaki, Naoto Oosawa, Mitsuharu Kamioka, Hiroaki Katagiri, Yusuke Hashida



日本の波が美しい！

老舗旅館に泊まる 伊豆・湯けむり 波乗り紀行

日本は海岸線の国だ。じつは、こんなに海岸線の美しい国はないのであって、しかもそれがみんな豊富にある。だからサーフィンができる。日本は火山の国だ。じつは、こんなに、いや言ってもな、こぞんじのよう、いたるところで噴火し、温泉がばばば湧き出ている。考えてみれば、日本のサーファーだけが、このふたつを同時に楽しめるのだ。

文：生和寛 写真：榎田勇人 構成：東谷佳史
shot by Kenichi Iwaoka photos by Shigeo Enoki overall design by Susuki Konomura



1：川崎康成的に買うと、トンネルを抜けるとポイントだった。わけ、墓石が海から大岩へ向かう。それが右側の写真で、大きなうねりが沖で崖のようになっている。2：稲葉プロは優しい。笑顔が美しい。聞けばなんでも教えてくれる。3：河津川の上流、湯ヶ野温泉に川崎康成の古い旅館がある。稲田屋、文豪は学生時代この宿に泊まり、書信を得て、後年、名作『伊豆の踊子』を書いた。4：海水浴客であふれる白浜は歌謡した



日本中の海を旅したプロである。世界だって股にかいた。プロはしかし、サーフィンのプロであって、サーフトリップのプロではない。どうです老舗旅館？伊豆の稲田屋？温泉入って美味しいもの食べて。湯上がりにビール飲んで。「行きましょ。ボク、ビール大好き。いつも波ばかりで、寝るのはそこら、食べるのもそこら、なんですよ。いい旅館に泊まるなんて考えたこともないなあ」稲葉康成プロ。グリーン／千葉一宮在住／サーフィショップ DEEP SURF。強面で一見恐ろしい。さぞコンテストでは相手をびびらせることだろう。笑うと、突如、内面の優しさが表にでる。その昔、サーフィンに熱中するあまり学校を休み、先生から「学校ヤスムネ」と皮肉られた。

稲田屋は文豪が愛した旅館である。大塚も泊まった。敷居は高くない。川崎康成が最初に泊まったのも学生時代である。ただ温泉宿としての機能が素晴らしい。稲葉氏は伊豆を代表するお風呂だ。河津川を渡るいと静寂へたどりつくことはできない



プロ、たまには
こういうサーフトリップも
ありじゃない？

